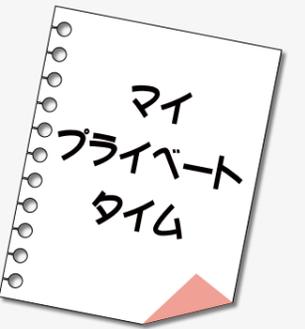


時を超え、人をつなぐ

おののじょう
大野城市長(福岡県) 井本宗司
Muneji Imoto



古代山城に抱かれたまち

朝、市役所まで歩いて登庁。その道すがら、常に私の右手遠方に広がっている緑の山並み、それが四王寺山です。

古くは大野山と呼ばれた標高410mの山頂からは、福岡の市街地、さらには博多湾から遠く対馬に続く海原を望むことができます。春夏秋冬、四季折々の色合いを見せ、また、その日その日の木々の鮮明度によって、「今日は晴天だな」「これは雨が近づいて来そうだ」と天気予報も果たしてくれる、そんな存在でもあります。子どものころから慣れ親しみ、そして、今も変わらず私たちを見守っている大野



国の特別史跡「水城」跡、そして「大野城」跡が眠る四王寺山

山、そこに、大野城市の名前の由来ともなった、朝鮮式山城「大野城」が鎮座しています。

「大野城」は、天智4年(西暦665年)に築かれた日本最古の山城で、その前年に築かれた「水城」と共に、白村江の戦いで敗れた当時の大和政権が、唐・新羅の連合軍の侵攻に備え、大宰府防衛のために築かれた施設です。その範囲は近隣の太宰府市、宇美町、そして本市の3つの自治体に及び、「水城」と共に国の特別史跡にも指定されています。

強大な力を持った隣国がいつ襲ってくるかも知れぬという恐怖の中、当時この筑紫の地に住む人々が、どれほどの危機感を抱き、国難に立ち向かおうとしたのでしょうか。実際に、この緑深き「大野城」を訪れると、残存する土塁、石垣、礎石群のその壮大さから、当時の緊迫した国際情勢や、わが国を、そしてふるさと、家族を守るため、皆が一つとなり身を賭して事に臨んだ、その息遣いが聞こえてくるかのようです。

今年で市長就任7年目の年となりますが、当初から私は、本市の名前の由来ともなっているこの「大野城」を何とか市内外にアピールできないかという想いがありました。そして昨年9月、「古代山城を守り、伝え、活かす」という理念にご賛同いただいた、九州・中国・四国7県の実

いと思っています。

『真剣に生きる姿こそ、かたみ』

今年の春は、東日本が未曾有の災害に見舞われ、大野城市でも全市を挙げて被災地支援に努めています。この決して忘れることができない4月、新たに19名の新規採用職員が入庁しました。ここ数年、新たに奉職した職員と、2年目、3年目の職員に対し、直接私の思いを伝える機会を4月の早い時期に設けています。

2、3年目になると、入庁当初の緊張感がゆるみ、それが、あいさつ、身だしなみ、歩き方といった日ごろの所作に現れ



勤労感謝の日に幼稚園児より花束を受けた筆者(後列中央)

てきます。

今年、私が私淑する森信三師の数々の言葉を彼らに伝えました。

師曰く『真剣に生きる姿こそ、かたみ』と。公職に携わるものとして、常に真剣に取り組み、真剣に考え、その上で生み出された結果は、たとえそれが成功せずとも、必ずやその人の力となり、やがて、このまちの財産となっていく。

他市同様、本市の職員構成も、団塊世代の大量退職に伴いここ数年で劇的な若返りを見せています。今の大野城市を築き上げてこられた先達への感謝の心を忘れず、「公」として、自分たちに何ができるのか、徹底的に考え抜き、行動する」という生き方を、今の若い職員達につなげていくこと、それが、私の大きな使命の一つであると考えます。

無所属の時間をどうつくるか

平成3年に福岡県議会議員に初当選して、早20年が過ぎました。市長に就任してからは、ほかの首長同様にプライベートな時間、いわゆる「無所属の時間」をつくるのが難しくなっています。

ゴルフも封印、長年やってきた野球も始球式で実力を発揮する程度で、私個人では、健康管理こそが最大の命題となっています。早朝、深夜の自分の時間を大切にしながら、時に妻と語り、読書に



「古代山城サミット」大野小学校6年生(当時)による学習発表

に22もの自治体の皆さんが、ここ大野城市に集われ「古代山城サミット」を盛大に開催することができました。これは、平成18年に山口県光市で始まった「神籠石サミット」の理念を引き継ぎ、「神籠石系山城」と「朝鮮式山城」を抱く関係自治体が、1300年余という悠久の時を超え、今再び、古代山城のネットワークを再構築しようとしたものです。本市は来年4月には市制40周年を、さらには「大野城」築城1350年を4年後に控えています。この絶好の機会に、古が鮮やかによみがえり、今を生きる私たちが大いに親しみを抱き、そして未来の人々へとつながっていく、愛するふるさと象徴とするための取り組みを、積極的に進めて行きた

ふけることにより、英気を養いリフレッシュしてきますが、何と云ってもたまに訪れる孫に引きずられ、戯れるひとときが日常の癒やしにもなっているようです。この子らに、何を残し、どうつなぐか、時の首長の責任は重く大きいものです。未来の世代からのメッセージに耳を澄ませ、30年後でも批判に耐え得る「しくみ」づくりと次代を担う「ヒト」づくりに、少数精鋭なる職員、参画意欲旺盛なる市民と共に、さらに邁進してまいります、愛郷と献身の精神で。

【座右の銘】

一眼は遠く歴史の彼方へ、そして一眼は脚下の実践へ(森信三)



四王寺山で開催された福岡県植樹祭(平成22年4月24日当時の麻生渡福岡県知事(後列中央)と共に)